

8 課

11月21日

教育とあがない



安息日午後 11月14日

暗唱聖句

聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。(IIテモテ3:16、新共同訳)

聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。(IIテモテ3:16、口語訳)

今週の聖句

創世記1:26、27、イザヤ11:1~9、IIテモテ3:14~17、
列王記上5:9~14(口語訳4:29~34)、ヨハネ14:16、17、Iコリント2:1~16

今週のテーマ

聖書には、神と神の民の長い物語が記されています。時としてそれは、一時的にせよ、うまくいかない恋物語と見られたり、あるいは、父親と、最終的に戻って来る反抗的な子どもたちの物語と見られたりもします。

しかし、今週の学びのために、私たちは聖書物語の中に別の主題、つまり教師と生徒の主題を発見するでしょう。生徒たちは試験で赤点を取り続けますが、教師は忍耐強く教科を何度も繰り返し説明し、最終的に一部の生徒はそれを学び取るのです。

聖書物語は、一つの例外を除けば、私たちがよく知っている人間の物語と大して違いません。神と神の民の物語には、良い終わり、目標への達成が保証されています。ご自分の民に対する神の恵みはその結果を保証しているのです。このような関係における人間の責任は、しばしば誤解され、恐れられてきました。多くの人が、それには義務が伴うと考えたからです。しかし実際のところ、聖書物語は基本的に、神を知り、神のみ心を理解するようという招きです。確かに、神を知るために学ぶことは、神の恵みに対する私たちの最も大切な応答でしょう。私たちはお金を出してそのような恵みを得ることはできませんが、それを学ぶことはできます。もしキリスト教教育が、その根本において、この恵みについて教えていないとしたら、それはいったい何なのでしょう。

問1 創世記1:26、27、5:1、3を読んでください。これらの聖句は、まず神が人間をいかに創造され、やがて、罪を犯してあとに何が人間に起きたのかということについて、どのようなことを教えていますか。

「神にかたどって」という言葉は、何世紀にもわたって、聖書注解者たちを魅了してきました。人間が最初にかたどって造られたこのかたちとは、何でしょうか。例えば、それは、神が鏡をのぞき込み、見た目をご自分に似ている新しい創造物を生み出され、外観が他の生き物よりも似ているという意味でしょうか。あるいは、創造主と人間の間、霊的、知的類似性や親和性があることを指しているのでしょうか。学者たちは、この表現が意味しうることに、さまざまな解釈を聖書から引き出してきましたが、聖書は詳しく説明していません。しかし、人間が罪を犯したあと、神のかたちから変わってしまったということ、私たちは理解できます。ですから、エレン・G・ホワイトは、教育の目的が創造主のかたちを人間の中に回復することであると書いたのです（『教育』3～5ページ）。

教育は、どうしたらこのようなすばらしい目標を達成できるのでしょうか。

第一に、神が人間を造られたのは交流するためであったということ、覚えておく必要があります。親が子どもたちと交流するようにです。神は、人間の親が自分にかたどって子どもを造るように（創5:1）、ご自分にかたどって私たちを造られました。その結果、（神の家族に属する）ご自分の子らとなるように私たちを育てることがおできになります。神は私たちと交流し、永続的な関係を築くことがおできになるのです。それゆえ、神のかたちというのは、二つの存在（神と人間）が心を一致させられるようにする「心のかたち」以上のものです。これは、まさに教育の中で生じるものです。最初は、家庭における親と子の間で、のちに教師が教育の働きを引き継ぐと学校で……。明らかに神は、ご自分にかたどって人間を造られたとき、ほかの多くの生き物とは区別して、私たちがよく知るこのような教育の過程を意図されたのです。神がそうなされたのは、神のかたち（心）が私たちのかたち（心）の中に反映されるまで、神が私たちを教え、私たちが神から学ぶことができるようにするためだったのです。

あがないの物語は、創造から受肉、受肉から再創造に至るまで、教育の物語です。神は教師であり、天は永遠に学校です（『教育』352ページ参照）。家庭、教会、学校、大学において、また生涯にわたって、キリスト教教育に携わる私たちにとって、この考えには、どのような意味がありますか。

聖書は、イエスを説明するために多くの言葉を用いています。少し例を挙げただけでも、神の子、メシア、人の子、救い主、あがない主、主、神の小羊などがあります。しかし、ユダヤとガリラヤでの3年余りの公の働きの間、イエスのことを最もよく知っていた人たちにとって、イエスは先生でした。彼らはイエスを「師」とか「ラビ」と呼びました。いずれも「先生」という意味です。

それゆえ、教職や教える働きは、イエスが公の働きを実行するうえで特に適した方法だったに違いありません。イエスのあがないの働きは、どことなく教える働きと似ています。さらに、それは福音の預言者によって預言されていました。

問2 イザヤ11:1~9を読んでください。この箇所は、イエスの教える役割について、どのようなことを明らかにしていますか。

聖書の中で、メシアに関する最も驚くべき預言の一つは、イザヤ11章の中に見いだされます。その1節から3節は、来るべきメシアを教育用語で、つまり知識、思慮、知恵、識別といった言葉で描いています。そしてこの箇所は、次のようなすばらしい約束で締めくくられています——「水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる」（イザ11:9）。たぶんこのような聖書の教えがエレン・G・ホワイトにひらめきを与え、教育に関する彼女の本の中で、教育の働きと救済の働きは一つである、と指摘させたのでしょう（『教育』22ページ参照）。

ヨハネ3:1~3を読んでください。ニコデモはイエスをラビと呼び、またさらに、イエスがなされたしるし（つまり、奇跡と、命の意味に対する洞察）のゆえに、イエスの教えの賜物が神からのものであると見なしています。イエスはニコデモに、神の国を見る（理解する、入る）ために生まれ変わらなければならない、とお答えになったとき、イエスに与えられた称号〔ラビ〕はお受け入れにならなかったとしても、教えの賜物の源については、確かに認められました。これは、イエスの場合でも、ほかの人に教える権威は神に由来するということです。

確かに、教えることは神からの賜物です。それは、神によって託されるものであり、イエスによって採用されたものであり、教えられる者たちによって、神の権威を有していると認められるものなのです。

主の知識が世界中に広まることに関するこの預言を成就させるために、私たちはどのような役割を担っていますか。

問3 IIテモテ3:14~17を読んでください。これらの聖句は、キリスト教教育における聖書の役割について、どのようなことを教えていますか。

聖書の最初の部分に相当する「トーラー」という言葉は、時として「律法」と訳されます。これらの書巻の中には、多くの律法が記されているからです。しかし、「トーラー」というのは、実際には「教えること」や「論し」を意味します。このような理解は、多くの人が聖書の「律法」だと考えるもの、つまり私たちが神の好意を得続けるために従わなければならない規則や規定とは、かなり異なります。そうではなく、律法というのは、神が最初に人間を創造されたときに意図された契約関係の中で、人間がいかに幸福かつ安全に生きられるか、その生き方を扱う教材として用意されたのです。

旧約聖書の次の二つの部分は「預言書」で、神の民がいかにこの教材を習得し、それに従って生きたか（「前預言書」または「歴史書」）、また、彼らはこの教材から何を学ぶべきであったか（「後預言書」）について報告しています。旧約聖書の（ヘブライ語で「諸書」と呼ばれる）残りの部分には、うまくいったり、うまくいかなかった教師や生徒たちの実例が、彼らの教育経験とともにいろいろ含まれています。これらの書巻の中で、教育的に成功した実例は、エステル、ルツ、ダニエル、ヨブでしょう。失敗の中には、ヨブの4人の友人が含まれるでしょう。言うまでもなく、詩編は賛美の書ですが、教育的な詩が少なくとも三つ（詩編1編、37編、73編）含まれています。

四福音書は、教育的目的を意図した材料が（とりわけ、イエスのたとえ話の中に）豊富です。パウロの手紙の多くは、強い福音宣言で始まっているものの、クリスチャンの日常生活に関する教育的材料や実際の教訓で終わっています。黙示録は教育的材料であふれています。例えば、キリストの教会の未来の開示、全面的な開示は、神の小羊（イエス、偉大な教師）だけが開くことのできる書の中でなされています（黙5:1~5）。

モーセの書の中の教材がすべて現代に当てはまるわけではない、と言う人たちがいるかもしれません。それはそのとおりです。申命記17:14~20（王たちに関する指示）には、王位に就く者の選出に関する非常に明確な指示が含まれています。今日、私たちは教会で王を任命したりしません。聖書の中のこれらすべての教材を、私たちはどうしたら現代にふさわしく適用できるのでしょうか。

学校、勉強、教育といった言葉は、現代でははっきり理解できますが、聖書の中では日常的ではありません。もっと日常的な言葉が一つあります。「知恵／賢明」という言葉です。例えば、旧約聖書は賢い男女について言及しています（サム下14:2、箴16:23）。

問4 列王記上5:9～14（口語訳4:29～34）を読んでください。この箇所は、知恵の大切さについて、どのようなことを教えていますか。

ソロモン王は、動物や植物について語り、豊かな知恵を伴う格言を口にする非常に賢い人として、つまり学識のある人として、（王上5:9～14〔口語訳4:29～34〕）指摘されています。箴言とコヘレトの言葉には、ソロモンや古代の賢い教師たちによるものと見なされている、数多くの主題に関する賢明な教えが含まれています（箴1:1、25:1、30:1、31:1）。

聖書によれば、知恵は、今日の私たちの教育とよく似ています。それは、人が親や教師から学ぶもの、とりわけ若いときに学ぶものですが（コヘ12:1）、実際のところ、人は一生を通じて知恵を蓄積していきます。第二に、ほとんどの場合、知恵には実際の側面があります——例えば、冬に食べ物に困らないよう、夏の間食糧を集める蟻から学びなさい（箴6:6～8）、など。

しかし、知恵は実際的であるだけでなく、理論的な側面も持っています。なぜなら、知恵は神に対する信仰によって始まり、ある種の基本原則に従うからです（箴1:7）。知恵は、私たちが他者に迷惑をかけず、他者の利益のために生きるのを助けるとともに、私たちが不運から守るのに役立ちます。さらに知恵は、今日の教育と同様、私たちが投げかけるすべての疑問に答えてはくれません。しかし知恵は、私たちに未知のことを追求させる一方、今わかっていることで私たちが満足させてくれます。そしてそれは、私たちが神を知り、神の恵みを信頼することを学ぼうと、正しい姿勢なのです。エレミヤ18:18によれば、賢い教師の役割は、祭司や預言者の役割と同等に見なされています。三者はいずれも神からのメッセージを、律法の教え、教育的勧告、特別なメッセージという形で人々に伝えるのです。

どうしたら私たちは知恵を学び、それをあとに続く人々に伝えることができるのでしょうか。このことはなぜ、私たちにとって、重要なのですか。

偉大な教師イエスがこの地に残される生徒、つまり弟子を教育される際に、聖書における教育の注目すべき一つの原則があらわれています。弟子たちは3年半、つまり私たちが高校や大学の教育に割り当てているのとはほぼ同じ期間を、イエスとともに過ごしました。高校、大学、いずれかの期間を終了するとき、人によってさまざまですが、生徒たちは自分でやってゆける準備ができたとはしばしば見なされるものです。

しかし、イエスはずっと慎重で、ご自分に従う者たちに、聖霊の指導の下での継続的教育を提供されました。聖書のほかの箇所では、その教師、導き手は「慰め主」「弁護者」（ギリシア語で「パラクレートス」）とされており、この方はイエスに従う者たちと永遠に一緒にいてくださいます（ヨハ14：16、17）。また、「真理の霊」とも見なされています。聖霊は、教育者とは見なされていませんが、聖霊の働きは、とりわけ真理の探究や発見に関係するとき、確かに教育的です。

問5 1コリント2：1～16を読んでください。パウロは、教育との関連において非常に重要などんなことを言っていますか。

パウロはまず、コリントへ初めて行ったときに、イエス・キリストとその十字架について以外何も語らなかったこと（1コリ2：2）——気の利いた知恵ではなく、福音だけを宣べ伝えたこと——をコリントの教会員に思い出させています。しかし、それで終わりではありませんでした（同2：6）。なぜなら、この新しいクリスチャンたちがひとたび成熟したなら、使徒はまた訪問して彼らに、知恵を、つまり世界が始まる前から神が隠しておられたこと（同2：7）、神の深みさえも（同2：10）教えようとしたからです。あらゆることは、神の霊が学び手の霊と結びつくとき、その導きのもとに学ぶことができます。

そのような学びはどれほど深く、どれほど多くの学びが、聖霊に導かれる者たちに提供されるのでしょうか。この章は、預言者イザヤの言葉を引用して締めくくられています——「だれが、主の霊を導き、その相談役となって主を教えたか」（イザ40：13、口語訳）。当時の普通の人々に語りかけていた預言者は、だれにもそのようなことはできない、と言っているのでしょうか。しかしパウロは、「わたしたちはキリストの思いを抱いています」と結論づけることで、その考えを訂正しました。つまり、霊に満ちたクリスチャンは、神のみ心さえ理解し、義の道を知るのに必要とされることをいくらかでも学び、理解することができるというのです（1コリ2：10～13）。

大宣教命令（マタ 28：18～20）は、世界中で目覚ましい宗教運動を引き起こしました。わずかばかりの使徒や宣教師（両者はいずれも「遣わされる者」を意味します）が全世界を歩き巡り、生徒を集め、彼らを弟子にし、イエスを信じるように呼びかけ、バプテスマを授け、イエスが命じておられたことをすべて彼らに教えました。その光景は、異なる文化を代表し、異なる言語を話す、全世界からのキリスト教改宗者がバプテスマを受け、クリスチャンとして自分たちの教育を受け始めるというものです。それは驚くに当たりません。なぜなら、彼らにはまだ学ぶべきことがたくさんあったからです。

クリスチャンが常に学んでいる理由は、単なる知的好奇心や知識を知り尽くしたいという意欲ではありません。むしろ、クリスチャン生活と信仰が日常生活の隅々まで浸透しているからです。学ぶべきことはたくさんあります。それゆえ、新約聖書のさまざまな手紙には、イエスについての「宣教」（新約聖書で「ケリュグマ」と呼ばれる）と、クリスチャンが学ばなければならないあらゆることに関する「教え」（新約聖書で「ディダケー」と呼ばれる）とが含まれています。「宣教」の良い例は、Iコリント 2：2に見られますが、4章からは「教え」が始まり、手紙の残りの部分で断続的にずっと続いています。クリスチャンが学ばなければならないこととは、何でしょうか。

労働、休息、社会問題、地域内での人間関係、教会と礼拝、経済、慈善活動、権力者との関係、カウンセリング、家族制度、結婚関係と子育て、食事と料理、衣服、加齢と終活、私生活とこの世での人生など。クリスチャンになるというのは、こういったことすべてやそのほかのことについて学ぶことを意味します。これらは自然に理解できるわけではありません。学ばなければならないのです。

話し合いのための質問

- ① 教会の宣教にとって、教育的働きはどれほど重要なのでしょうか。
- ② エレン・G・ホワイトは、どういう意味で「天は学校である」（『教育』352ページ）と書いたのでしょうか。
- ③ Iコリント 2：1～16 を読み直してください。神が靈感を通して私たちに啓示しておられることについて、パウロは何と言っていますか。この世の知恵も支配者も滅び行くという彼の主張について、考えてください。もし彼が当時そのように言えたのなら、私たちの時代の「知恵」については、どうでしょうか。